

なでしこ通信 第 57 号

《隔月発行》

— 目 次 —

- ★子供と家庭の今日の変容
幹事 大津寄章三
- ★高校家庭科教科書にみる子育て
- ★『救う会えひめ』の活動報告
- ☆事務局から

子供と家庭の今日の変容 ■ □

めざす会幹事 大津寄 章三

冒頭から私事で恐縮だが、今年いよいよ教員としての最後の年を迎えることとなった。

ラストイヤーはかわいらしい一年生である。いまかれらの個人写真を片手に氏名の暗記に余念がないが、その名前の読みにくさに閉口しているのは私だけではあるまい。教員の大半はこの時期、新入学の児童生徒の氏名点呼にいらぬ骨を折っているのではなかろうか。そしてその傾向は年を追うごとに確実に色濃くなっている。

いわゆるDQN（編集部注：アタマが悪いの意味。ドキュンと読む）ネームとかキラキラネームとよばれるものである。ある大手企業の採用担当者は、おなじような評価の新人が当落線上に並んだ場合、まずDQNは採用しないという話を目にしたことがある。厳しい企業だと書類選考の段階からふるい落としてしまうともいう。いわく「育てた親の知的程度が知れるから」「顧客への企業イメージが悪化するから」だそうである。何をもってDQNと判別するかの線引きは微妙であろうが、少なくともいつとき流行ったアニメやかわいい系のキャラクター名を模した名をつけられた子供は、その後80年の人生をその名とともに刻まなくてはならないのである。

あえて暴論を承知で申し上げれば、これは親の劣化と言って差し支えないのではないか。社会科や学活、道徳などの授業で自分の名の由来についての調べ学習をさせてきたこともあるが、今後こういう「名から親の思いや願いに迫る」というねらいは達成しにくくなるであろう。わが子の名を一時の「ノリ」で決定することの意味、またかりに洒落っ気でなかったとしても、その名を背負ってわが子は老いていくのだという想像力がまったく欠落している。社会生活に翼を広げ根を張っていこうとする子に、その容貌にも時代性にも成長過程にも考慮しない名を冠することは分別ある親の所業ではない。子はやがて親の膝下から飛び立ち、社会という新天地で自分なりのかたちをした生き甲斐と幸せを築きあげるものだ、というごく当然の配慮と予想ができていないのではないか。

以前こんなことがあった。新入生のある生徒の髪型がややおかしいため、放課後該当生徒を職員室によび、理由をきいた上で休日に可能なかぎりなおしてくるように告げた。小学校と中学校の校則の違いが原因であり、本人も何の悪気もなかったことからいっさい叱責や強い口調も交えず淡々と笑顔で伝達し、担任からも家庭に協力をお願いした。しかし週明けに事情が一変、保護者からかなりの勢いで苦情が寄せられたのである。いわく、入学間もない生徒を放課後職員室によび、しかも何人もの教員で囲むとは何事か、登校をしぶるようになったらどうしてくれるかという申し出である。どうやら予想以上にセンシティブな生徒であったらしい。事情を説明しお詫び申し上げた次第であるが、やれやれである。濡れ衣やいいがかりであったというならわかる。しかし、新たな環境の中でとまどっている生徒を支えフォローするのが世の大人の基本スタンスではないのか。先生に指導を受けて凹んで戻ってきたというなら、わが子になぜ先生がそうしたかを説き、新生活に適應できるよう励ましてやってほしいと願うのは教員サイドの身勝手なのだろうか。

年齢とともにステップアップしていく生徒の環境変化に対応するため、各校には小一ギャップ、中一ギャップとよばれる非常勤講師が置かれている。ことほどさように配慮せねばならないほど今日の生徒からは柔軟性・対応力が失われているのである。学校と家庭に共通する「大人」という階層はいまこそスクラムを組んで子どもに接しなくてはならない時代を迎えている。私は今日の教育力のおとろえの大きな原因は「大人（親・教員）対子供」という2：1の関係が、「家庭（親・子供）対教員」という2：1の関係に移行しつつあることが大きいと思うのだが、いわば子離れ・親離れできない家庭にあっては学校は親子の格好のターゲットと化しているのかもしれない（世に報じられる教員の劣化も一因であるが紙数の都合で今回はふれない）。

かたや育児の社会化を訴える声もクレシェンドしつつある。親の劣化と子離れし難い家庭、さらに乳幼児を早くから施設に預ける風潮がどのような日本人を現出させていくのか、残り少ない教員人生の中で見極めていきたいと思っている。

□ ■ 高校家庭科教科書にみる子育て

先号に続き、松山市内の高校で使われている教科書の子育ての章を読み比べた。使用した教科書は先回と同じ以下のものである。

松山東高 開隆堂「次世代を育む」(p.28~p.47)

済美高校 第一学習社「次世代をはぐくむ」(p.20-p.41)

松山北高・済美平成 東京書籍「子どもと共に育つ」(p.30-p.53)

●次世代を育くむ●

【第一学習社】産まれてくる新しい命は、家族の一員としてだけでなく、社会の一員としてもかけがえのない存在である。次ぎの世代を担う子どもたちを、どのように育てるかによって、将来、どのような社会になるかが決まるといってもよいだろう。私たちには、次世代の子どもたちをすこやかに育てる責任がある。「子どもを生き育てること」は、人類の歴史がはじまって依頼、今日まで引きつがれてきた。自分の親、祖父母、そのまた前の世代とさかのぼっていけば、現在の自分が存在するまでには、幾世代もの多くの人びとの命の歴史があることが想像され、その壮大さを感じるができる。私たちは、何世代も受けつがれてきた、このかけがえのない命の大切さを忘れてはならない。(p.20)

《編集部コメント》

次世代を育てることの大切さが違和感なく読める。【開隆堂】と【東京書籍】には、これに相当する記載はない。

また、【第一学習社】には、新しい命が精子と卵子が合体してできた受精卵から始まることや、妊娠と基礎体温の変化について言及している。さらに人工中絶の1割を10代が占めていることやその後遺症に触れ、「中絶しなければならない妊娠」をしないよう呼びかけている。

【開隆堂】と【東京書籍】は子どもが誕生したところから第2章が始まる。しかし、未婚者の人工妊娠中絶が依然増えており、また、避妊薬の使用は重大な副作用が伴うのである。性交奨励教育とも思われる性教育が盛んな昨今、こうしたことの危険性も併記されるべきではないだろうか。

●性感染症●

【第一学習社】正しい性の知識のないまま、安易な性行動をとることは、望まない妊娠や性感染症(注：欄外)への感染などのリスクをともなっている。(欄外の説明…性行為により感染する病気の総称。梅毒、クラミジア感染症など、さまざまな感染症がひろがっている。HIV(ヒト免疫不全ウイルス)感染による後天性免疫不全症候群(AIDS)もその1つ

である。エイズは、発症すると死亡率が高く、治療も困難であるため、性の解放に警鐘を鳴らすことになった。)

《編集部コメント》

【開隆堂】と【東京書籍】には言及がない。クラミジア、淋病、ヘルペス、トリコモナスなどの性行為感染症に感染する若者が急増している。その感染度は他の先進国の10倍と言われて久しい。最近、子宮頸がんワクチンの甚大な副作用が社会問題化しているが、初交年齢の低下、性交渉の相手の数の増加が、性感染症や子宮頸がんの発症に拍車をかけている。高校時代の性交渉に孕む危険について、しっかり教えるべきではないのか。性感染症に罹ると健康な妊娠や出産が困難になり、それは少子化の原因にもなっている。

【第一学習社】には、10代の妊娠・出産は産前管理が不十分なため、早産や低出生体重児の発生率が高いことや、次世代に対する責任として妊娠中の心身の健康管理をすべきことを書いてある。また、胎児の発育と母体の変化が、胎児の8枚の写真とともに詳しく説明されていて興味深い。喫煙が胎児の体重や身長に及ぼす影響を表す図がある。他の2社は、上にも書いたが、乳幼児から始まっている。昔の日本人は、母の子宮に宿った時点で1歳と数えたのであるが。

また、高年齢になるほど妊娠しにくくなり、妊娠・出産に危険が伴うこと、産まれる子供も適齢期の出産より危険にさらされる可能性について言及して欲しい。出産適齢期は20代。35歳を過ぎると自然流産率が20%、40歳を過ぎると40%になる。産みどきがあるということを若者に知らせる必要がある。欧米では女性の身体には妊娠・出産適齢期があるというようなキャンペーンがあると聞く。年齢とともに女性の卵子は老化するし、男性の精子の力も落ちていくので妊娠しにくくなる。子供は親の好きな時に産めるのではない。

●リプロダクティブ・ヘルス/ライツ●

【第一学習社】「リプロダクティブ・ヘルスと思春期」

リプロダクティブ・ヘルス/ライツは、一般に「(女性の)性と生殖に関する健康/権利」と訳されている。妊娠・出産にかかわるすべてにおいて、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であること、そして、子どもを生むか生まないか、いつ何人生むかなどについて、女性が自己決定権をもつべきであるという主張である。妊産婦死亡率、乳児死亡率、女性のHIV感染状況などは、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの危険指標であり、一般に、欧米や日本では低く、アフリカ諸国などでは高い。思春期のリプロダクティブ・ヘルスの観点から、将来、親になる世代であることの責任を自覚して、10代の望まない妊娠を避けることや、性感染症にかからないように自己管理することが、大切である。(p.21)

《編集部コメント》

2 行目の「妊娠・出産にかかわるすべてにおいて、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態である」はどういうことか。社会的とは結婚していることだと我々は考えるのであるが。日本は、妊産婦死亡率、乳児死亡率、女性の HIV 感染率は限りなく低いはずである。その日本の高校生に「生む生まない、いつ何人生むかなどは女性が決める権利がある」という左翼思想を吹き込む必要があるのか。4 行目「…主張である。」とは、そういう主張があるが、著者は全面同意しているというわけではないという逃げ道だろうか。

【開隆堂】新しい命は、男女双方の健康の下で自分たちの責任ある選択として誕生する。

(注：欄外) 欄外：カイロ国際人口・開発会議（1994）ではリプロダクティブ・ヘルス/ライツという考え方が示された。リプロダクティブヘルスとは、妊娠・出産の当事者である女性はもとより、全ての人が性と生殖について、安全かつ健康な状態である。そしてリプロダクティブ・ライツとは、子どもをもつ・もたない、何人もつかなどを自ら決める権利である。(p.40)

《編集部コメント》

索引になかったので見落とすところであった。新しい命は、フェミニズムによれば女の自己決定権行使によって誕生するのではないのか。自ら決める権利を有するという「自ら」とは誰のことか？男女双方という解釈は、寡聞にして初めて目にした。

●アタッチメント●

【第一学習社】情緒豊かな人間に育てるには、乳幼児期に、子どもと向きあつて目と目をあわせ、親密なかかわりをもつことが不可欠である。それはまた、身近な特定の人に対する、アタッチメント（愛着）（注：欄外）の形成にとって重要であり、その後の人間関係の順調な発達につながる。(p.26)（欄外…アタッチメントの語源は「くっつく」である。ある特定の人やものに、くっつきたいという愛着要求は、表現や対象は変化するが、生涯を通して持ち続ける要求である。）

【開隆堂】この特定の時期（注：6～12ヶ月ごろ）に特定のおとなとの密接なかかわり（愛着）が深まると、知らない人を怖がって泣くなどの人見知りや、後追いが始まる。(p.34)

養育者との愛着の形成(注：欄外)は、子どもの「心の安全基地」となる。何か怖いことや困ったことに出会ってもきっと養育者が守ってくれるという愛着に基づく信頼感によって、子どもは能動的に見知らぬ世界を探索する。このような探索活動は知的な発達の土台にもなる。(p.40)（欄外：子どもにとって愛着の対象は、父親・母親だけではない。子どもに継続的に密接にかかわり、子どもに温かく接し、子どもの発するサインに敏感に反応し、その意味を理解しタイミングよくサインを送り返す人びと、祖父母や保育士等も愛着

の対象となる。)

【東京書籍】乳児は、生理的欲求を親から満たしてもらうことで、喜びと満足を得ることができ、やがて親との間に強い心理的な一体感が生まれる。この心のきずなを愛着といい、子どもの心身の安定した発達に欠かせない。(p.36) (欄外注：親 ここでは責任を持って子どもの保育を行う者のことをいう。)

《編集部コメント》

アタッチメントの重要性を矮小化し、母子の繋がりを真っ向から否定しようとするフェミニストの意図が見え見えである。田下昌明先生は「真っ当な日本人の育て方」(新潮選書)でアタッチメントについて以下のように書かれている。

赤ちゃんの心が発育していく途中には、アタッチメントの前に抜けてはいけない大事な要点や段階がある。まず、インプリンティング。「刷り込み」または「刻印付け」と訳される。人間のインプリンティングは、人間としての基本的な感情の表わし方、人間としての基本的行動の仕方が赤ちゃんの脳に刷り込まれることだ。「お前は人間なのだ」ということを、赤ちゃんに思い込ませる。その期間は、生後6週間頃から始まり、6ヶ月目あたりで終わると考えられている。だいたい「人見知り」が始まったら、インプリンティングは完了と考えられる。

母親の動作に赤ちゃんが反応し、赤ちゃんのしぐさに母親が応えるという、母と赤ちゃんのやりとりの中でインプリンティングは進行していく。24時間一緒にいて赤ちゃんの世話をする一人の女性ならば、生みの親でなくてもよい。「一人の女性による継続的な養育」が必要だ。

一体感が成立することによって、今度は次ぎの段階であるアタッチメント(愛着行動)がスイッチ・オンされる。インプリンティングがそれまでにできあがっていなければ作動しない。

愛着行動の中心となっているものは、特定の人に対しての親密な情緒的絆を結びたいという人間として誰もが持っている性質を、人間性の基本的な構成要素である、とする理論である。それはすでに新生児期に原初的な形で存在し、成人から老人に至るまで存在し続ける。アタッチメントは、乳児期や児童期では、自分を保護し、安心させ、そして支持してくれる親との間に結ばれる。青年期や成人期においてもこの絆は存続し、加えてまた新しい絆で補完していく。その新しい絆とはふつう異性との間で結ばれるものである。

愛着行動は、血圧や体温を一定に保つシステムと同様に、体内に内臓されているシステムと考えられているが、このシステムによって子供時代に心の中に形成された自己、及び愛着対象との連関は、生涯にわたって人格の中心となる。

●三歳児神話●

「三つ子の魂百までも」ということばがあるが、教科書では見事に否定されている。

【開隆堂】「育児は母親が担うもの」と思っていないだろうか。「3歳児神話」「母性神話」と呼ばれる考え方から、子育ては主に母親が担うものという意識と役割分担が根強い。しかし、妊娠・出産も含めて、新しい生命をこの世に生み出し、育てる仕事は、母親一人が担うものではなく、男女が協力し合っけなす遂げていくものである。

＜コラムの説明＞「3歳児神話」とは「子どもは3歳までは常時母親の手で育てないと子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」という考えである。欧米の母子研究の影響を受けて日本では1960年代に広まった。母親が育児に専念することは歴史的に見ても普遍的なものではなく、たいていの育児行為は父親などにも可能である。また複数の科学的な研究から、3歳未満で保育所などに預けられて育った子どもとそうでない子どもの発達には差がないことが明らかになっており、平成10年の厚生白書でも「3歳児神話は根拠がない」とされている。

また、3歳児神話に関連して、日本の社会には「女性には母性があるのだから、女性が子育てをするのは自然であり、子どもにとってもそれが最善だ」という母性観が強い。こうした母性観に基づく「母性神話」によって、母親が一人で子育ての偏重な負担を背負う事態が生じがちである。母性神話に縛られず、子育てにおける母親の苛立ちやストレスを認め、複数の人が子育てに参加することが必要である。（注：男児を抱えた母親が「3歳児神話」「母性神話」と書かれた巨大な石に押しつぶされそうになっているカラーのイラスト付き）（p.41）

【東京書籍】核家族化が進み、かつてのように子の祖父母や親族などに子育てを助けてもらう機会が減少しており、子育てはおもに親だけの役割となっている。共働き世帯が過半数になった一方で、母性神話（欄外注：女性は母性愛を本能としてもっており、母親が育児をすることが子どもにとって善・絶対であるという考え方）や3歳児神話（欄外注：3歳までは母親の手で育てないと、後々取り返しのつかないダメージを子どもに与えるという考え方。母性神話と共に、科学的根拠はない。）といった社会通念も根強く残り、子育ての責任を母親だけに押し付ける環境がなかなか改善されない。（p.48）

【第一学習社】記述なし。

《編集部コメント》

3歳まで母親（あるいはそれに代わる女性）が育児に関わることが子供の成育に非常に大切であることを田下先生は、母・父・子の関係を表す以下のような図で説明している。

一組の男女が結婚すると、男は夫、女は妻という立場になります。そして夫と妻の間には心の通い合った1つの世界ができ上がります。この世界を私たちは家庭といっています(図1)。

妻が妊娠すると家庭は〈図2〉のようになります。女性は妊娠したことが確実になったら、もうその時から、その女性の心の中には「母と子の世界」ができ上がるのです。

赤ちゃんが生まれてから3歳まで〈図3〉は、母と子の世界は、さらに強固なものとなります。分娩によって赤ちゃんの身体は母親から分かれていますので、母を示す円と子を示す円とは肉体的な意味では離して書かなければならないところですが、精神的には赤ちゃんはまだ母親から離れてはいません。

赤ちゃんが2歳頃になると、母の円と子の円との重なり具合が半分くらいになるでしょう。この頃になると子供はもう走ることもできるのですから、精神的な面では母にくっついていても、肉体的には母から離れているように見えるでしょう。

2歳ぐらいから、親や兄弟のすることをなんでもかんでも真似して、それをお手本として自分の脳に焼き付けているのです。母のすることは一挙一動、すべて真似をします。子供はその後、精神的にも肉体的にもぐんぐん発育を続けていきますが、しかし3歳までは常に母親を必要とします。すなわち赤ちゃんが3歳になるまでは、母親は朝から晩まで子供と一緒にいてやらなくてはならないのです〈図4〉。

図1《妊娠前》

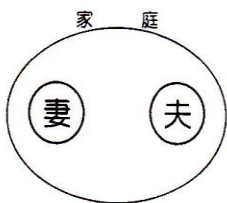


図2《妊娠中》

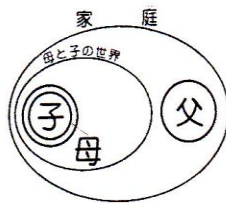


図3《3歳まで》

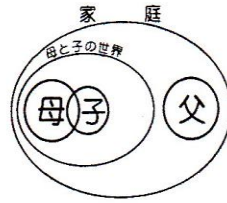
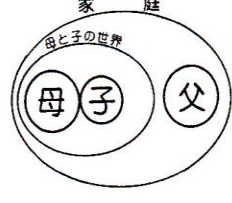


図4《3歳》



3歳を過ぎると、子供の心は次第にその子独自の、自分自身の心として独立を始めます。しかし、母と子の世界はまだしっかりと閉じています(図5)。したがってこの時期では、母親と長い間別れて暮らすということは、まだ無理なのです。

子供は、12歳前後まではまだ母と子の世界の中にある(図6)ので、外の世界からのいろいろな働きかけ(刺激)が、直接的に子供の心に影響を与えることは少ないのです。つまり、その子の周囲で起こるいろいろなことに対して、その子が反応を示す時、それはすべて母親の気持ちに大きく左右されており、母がいなければ外の世界からの刺激にうまく対応できないということです。

12歳前後になると子供は自ら、それまでの自分の心を包み、保護してくれていた母と子の世界のバリアを破って、自分自身の心として独立します(図7)。

図5 《3歳以降》

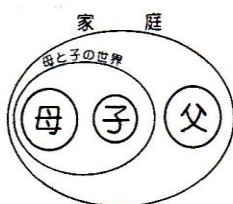
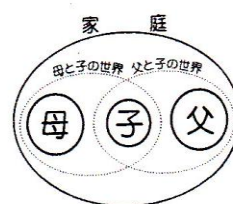


図6 《12歳前後》



図7 《15歳以降》



●父性・母性●

《編集部コメント》

家庭科教科書には、母性は否定される対象としか登場せず、父性ということばは存在しません。しかし、田下先生は、母性と父性の役割はまったく違うと述べておられる。

15歳ぐらいになると、子供の心はまだ未熟ではあるけれども一人の人間の心となり、この時期から子供にとって父親は母親と同等の存在になります（図7）。このことは、15歳までの育児には父親は必要ないと言っているのではありません。

特に、3歳までの育児をドラマに例えると、その主役は母親で、父親はその舞台の床だということができるでしょう。舞台の床がしっかりしていなければ、その上にのっている役者は安心して演技ができません。育児というドラマの進行に支障をきたすわけです。

「父親が育児に参加する」、当たり前なことでも何もわざわざ言う必要のないことですが、ただそれはあくまでも母親を労り、励まし、感謝し、援助する強い後ろ盾になることの一部なのであって、育児の主体になるのではありません。実際、父親は子供が乳幼児期の場合、育児の主体になりたくてもなれません。哺乳動物としての人類のDNAには、そのようなプログラムは書かれていないのです。

一方、父性愛というものはDNAに書かれていないので、そのようには発生しません。父性愛は「今、目の前にいる子は自分の子である」ということを納得するところから出発する、すなわち、社会的、後天的に発生するものです。生物学的ではなく社会的関係だからこそ父親は子供に社会性を教えることができるのであり、このことこそが父親の役割の中心をなすものです。父親が子供と積極的に遊んでやろうという心がけは、このあたりまでを目途にするとよいでしょう。遊んでやるとは言っても、あくまで躰、教育の一環なので、父親は常に指導的立場にいなければなりません。子供との間が「友達のような関係」になってはいけません。ここのところは現代の父親の最も陥りやすい誤解なので、厳重な注意が必要です。

《編集部コメント》

「三つ子の魂百までも」は「しっかり抱いて下におろして歩かせる」と続き、「しっか

り抱いて」は母の役割、「下におろして歩かせる」は父性の役割を示している。— 子育ての極意であるが、教科書は真っ向から否定している。

●基本的生活習慣の形成●

【第一学習社】食事・睡眠・排泄・清潔・着脱衣といった日常生活の基本的な行動を、基本的生活習慣（欄外注）という。これに対して、ルールをまもるなど、社会の一員として身につけるべき行動を社会的な生活習慣という。基本的な生活習慣も社会的な生活習慣も、子どもが自分の生活に自信と責任をもち、自立に向かうために身につけなければならない課題である。（p.32）（欄外：基本的な生活習慣は、次の方法で3歳ごろまでに身につける。①子どもに興味のあることをやらせて、できたときにほめる。②周囲の大人の行動が手本であることを理解させる。③繰り返し練習させる。④ひととおりの生活習慣が身につくまでは例外を持ち込まない。⑤楽しみながら取り組めるように周囲の大人が配慮する。）

【開隆堂】食事・排泄・睡眠・清潔・衣服の着脱など、生きるために必要な生活の習慣を基本的な生活習慣という。これらの習慣が身につくことは、生涯にわたる自立の一步である。幼児期は基本的な生活習慣を身につける重要な時期である。この時期、周囲のおとなは、子どもの「自分でやりたい」という気持ちを認めて援助すること、最初からうまくできなくても繰り返し行うこと、うまくできたらほめることなどを心がけて食事や睡眠の習慣をつけることで、規則正しい生活のリズムが身についていく。しかし現在では、おとなの労働時間が長時間化したり、生活時間が夜型になったりして、子どもの生活にも大きな影響を与えている。家族と共に遅くまで起きていて、朝起きられない、やる気がでないなど、生活リズムの乱れた子どもが増えてきているといわれている。

子どもの基本的な生活習慣の形成には、周囲のおとなの生活が深くかかわる。子どもは身近なおとなを模倣するのでその姿が、挨拶をする、人に迷惑をかけない、公共の場所や物を大切にするなどの社会的な生活習慣の形成にもつながっていく。（p.38）

【東京書籍】人間は家族や社会の中で生活するのに必要な、いろいろな生活習慣を持っている。幼児期は自立に向けた第一歩が始まる時期であるため、親は子どもが生活習慣を身に付けられるよう、さまざまな援助を行う必要がある。基本的な生活習慣の形成は家族の生活時間に影響されやすい。親の生活が夜型であると、食事や入浴、睡眠などの時間が不規則になり、子どもの生活リズムが乱れ、健康や発達を害することが問題となっている。

社会的な生活習慣は、大人からのしつけや働きかけだけでなく、仲間とイメージを共有できる遊びや、目的やルールのある集団遊びを通して、役割やルールを学びながら自然に身に付けていく。（p.41）

《編集部コメント》

基本的な生活習慣を、大人が「配慮」したり「援助」したりしているうちに、子供が自分で身に付けてくれるような、安易な考えが見える。

田下先生は、こうした基本的な生活習慣の形成をきっぱりと母親の責任とされている。

日常生活を規則正しくするためには、何をおいても母親は朝寝坊をしてはなりません。心身共に子供の健康な発育を願うなら、赤ちゃんが生まれたら、いや妊娠中から、これからの長い育児に入るにあたって「決して朝寝坊はしない」と誓わなければなりません。「お母さんはボクが何時に起きても、いつもきちんと身支度している」、このことが子供にとってどれほど頼もしい母親として映るか、また、「毎朝本当に大変だろうな。ご苦労様」と思う気持ち、それは計り知れない良い結果を子供にもたらすのです。このことだけでも子供は母親を尊敬し、言うことを聞く気になります。

聞きなれた言葉ですが、「子は親の後ろ姿を見て育つ」とか「子供は親の言うとおりにしないが、するとおりにする」などというのは、何も難しいことを言っているのではなく、こういうことを言っているのです。

「お母さんはうちで一番先に起きる人」になることによって、子供が起きる時間、朝ご飯の時間、お昼ご飯の時間、おやつの時間、昼寝の時間、夕ご飯の時間、お風呂に入る時間などが自然に正確に決まってくるものです。

赤ちゃんの時から規則正しい生活をしていると、中学校や高等学校へ行くようになってからも良い効果をもたらします。規則正しい生活を躰けておくと、その子が何歳になっても、たとえば夕食の時間なのに遊びに行ったまま帰ってこない、などということを防止することができます。それは、その子が非行に走ったりする可能性を少しでも少なくさせるでしょう。

「先に泣くか、後で泣くか」です。子供にどんな立派な服を着せても、いかに栄養のある食べ物を与えていても、日常の生活が規則正しくなければ子供の発育成長に良い効果を上げることができません。

《編集部コメント》

連休や来客は子供にとって最大の敵。3歳未満の子供にとって海水浴や動物園や温泉は情操教育の面でもまったく無益、いつもの遊びの方がありがたい。冠婚葬祭に連れて行かないこと。「ハンで押したような規則正しい生活」が、健康に育てるコツ…と大人にとっては変化のない面白くない生活指針が田下先生のご著書にはたくさん書かれている。

田下先生には平成18年9月に『真っ当な日本人の育て方』と題してご講演いただいた。この度ご著書を読み直し、あらためて子育ては親にとっての一大事業であること、母親の役割を完遂させるのは父親であることを再認識した。

★次回は、どの教科書も大きく扱っている「児童の権利に関する条約」（子ども権利条約）をみていく。

☆『救う会えひめ』の活動報告☆

椿祭りにおける「救う会愛媛」の拉致問題啓発活動にご協力ありがとうございました。めざす会担当の2月27日12:00～14:00は、目標10名のところを16名の方のご参加をいただきました。

下記は、25（水・曇）、26（木・雨）、27（金・晴）の3日間の成果でございます。

	署名数	募金額	タオル・ブルーバッジ
今年 (金曜分)	3,356 筆 (1,331)	474,048 円 (269,580)	タオル85枚 バッジ 396 個 (26) (216)
昨年	3,635筆	429,727 円	タオル125枚 バッジ 294個

また、第2土曜日の午後1時から2時まで市駅前では署名募金活動が行われています。是非ご参加下さいませ。

以下に、特定失踪者問題調査会の荒木和博代表の「署名活動」に関する4月5日付けメルマガを転載致します。

全国で集めていただいている署名ですが、ときどき「いつまでも署名を続けて意味があるのだろうか」という声を聞くことがあります。調査会自体は直接の署名活動をしていないので、お答えすべき資格があるかどうか分かりませんが、お願いも含めちょっとひと言。

署名集めというのは極めて地道な活動で、手間もかかりますし、それで直ぐに何かが動くということもありません。そういう意味ではご苦勞の割に実りの少ないことのように見えるかも知れません。しかし、昨年10月の政府訪朝団への北朝鮮側の対応を見ても分かるように、北朝鮮は日本の世論を非常に気にしています。

平成14年（2002）、5人の帰国とほぼ同時期に寺越武志さんが一時帰国を果たしました。ただしこれは日本人として帰ってきたのではなく、あくまで北朝鮮人金ミョンホとして代表団の1人としてやってきたのでした。そして北朝鮮からの監視人が武志さんが泊まった妹さんの家まで泊まり込んで監視したそうです。武志さんはお母さんの布団に入って泣いていたと言います。

寺越さんの話はまたあらためて書くとして、このとき監視人は毎日全ての新聞を取り寄せて、どう書かれているか読んでいたと言います。もちろん本国からの指示でしょうが、日

本の世論がどうなるか心配で仕方なかったのではないのでしょうか。

北朝鮮はあれだけ偉そうなことを言う割に、外部からの評判を非常に気にしており、その意味で地道な世論喚起は大きな効果があります。それを北朝鮮が認めるのは最後の最後でしょうが、全国で署名に取り組んで下さっている皆さんはもうひとがんばりお願いしたく存じます。もちろん私たちも署名活動の成果が実るように努力して参ります。

特定失踪者問題調査会代表 荒木和博

◇◇◇ 事務局から ◇◇◇

★4月8日・9日に両陛下が戦没者の慰霊のためにパラオに行かれました。10年前にサイパンに慰霊の行啓幸をなさいましたとき、私（青井）もご宿泊のホテルニッコーをお出になる両陛下をお見送りしました。日本会議の女性会員が手にしていた幾つもの千羽鶴に御製が結ばれていたのに気が付かれた皇后陛下が「まあ、御製ね」とおっしゃり短冊をお手に取られました。この度のパラオ奉迎団も15千羽の千羽鶴を持参、ご慰霊の祭壇や会場に供えられました。めざす会でも多くの方々にご協力いただき、約1000羽を奉迎団事務局にお送りしました。

★日本会議愛媛県本部名誉顧問・かいこう会会長、重松恵三氏の今治史談会での講演録「海員道の鑑 菅源三郎船長に見る『責任』とは」を同封いたしました。愛媛の偉人を一人でも多くの方に知っていただけたら幸いです。

★憲法改正を求める署名活動にご協力いただきありがとうございます。5月10日現在、13人の方から178筆の御署名をいただいております。

★松山市駅前や、大街道入り口での署名活動に参加しますが、署名して下さる市民はほんとうに少ないです。むしろ敵意や反感を示す人の多いのに驚きます。署名して貰えない原因の1つには活動者が少ないことがあると思います。椿祭りでの救う会の署名募金活動には、めざす会の担当時間には60代、70代の主婦の方々が大勢参加して下さいました。その「普通のおばさん達」が楽しそうにしている活動には一般の方々も協力しやすいのでしよう、たくさんの署名が集まりました。今の憲法改正の署名活動では、署名していただくどころか人々の関心さえ引かないのではないかと思います。「普通のおばさん達」に参加していただける署名活動ができないものでしょうか。

★第3回えひめ親守詩大会にめざす会は参加しないことが決まりました。親守詩大会は全国的にほとんどの都道府県で開催され、また第2回全国大会が2月に毎日新聞社の後援で開催されましたが、それらにはTOSSが大きく関わっております。TOSS愛媛は自分たちで

身の丈にあった規模で続けていきたいという希望をお持ちでしたので、めざす会は手を引きました。実行委員会のメンバーであったのは、渡部浩三（実行委員長）、水上紘一（幹事）、辻田寛（幹事）、上田佳江（幹事）、大津寄章三（幹事）、青井（事務局長）で年齢はほとんどが60代です。TOSSの先生方は40代が中心でした。2回の大会行事を推進する中で、学校の先生方と我々との間に考え方にギャップのあることを痛感させられたことでした。

★56号でご報告のように会報の発行回数を鑑み、会費の更新を1年延長してお願いしております。ご住所の下に印字されている数字は今まで会費を納入していただいた〈年と月〉を表しています。払込用紙の同封をもって更新のお願いとさせていただきます。年会費は平成25年11月23日付会報54号より2000円に謹んで変更させていただいております。よろしくお願い致します。

健全な男女共同参画社会をめざす会

会長 青井 美智子

〒791-0221 愛媛県東温市上村甲 218

TEL 090-8971-7721 FAX 089-964-3903

ホームページ <http://www.mezasukai.com/> メール michikoaoi25@yahoo.co.jp